



毎日多くの生徒が購買を訪れる

生徒に寄り添い慕われる存在

直撃! 澤田先生にインタビュー

澤田先生のプロフィール

今回は澤田先生に購買のお仕事についてお話を伺った。面白いエピソードをたくさん語ってくれた。

澤田一美先生は平成七年から美方高校で働いており今年で二十六年目。働くことになったきっかけは、前任の方が長期のお休みになつた時に、当時の美方高校の先生が澤田先生と知り合いということから声がかかったから。以前は中学校の英語の講師をしていたという。澤田先生は毎日二限目に出勤し、準備をしてから休み時間毎に販売を行い、昼休み後に片付けをして帰宅する。和やかな雰囲気です。生徒と会話をする姿が印象的な優しい先生だ。

購買のお仕事についてQ&A

Q、商品の仕入れはどのようにしていますか？
A、つぐみ福祉若狭事業所から仕入れられている。



歴史ある自動販売

売れ筋商品は多めに、考查や行事の日は少な目に加減している。

Q、自動販売機はいつから設置していますか？
A、今の自動販売機は実は二代目で澤田先生が美方高校に来る前からあった。ちなみに一代目は創立時からあったそう。歴史のある自動販売機でも重宝している。他校ではあまり見かけないものなのでこれからも大事に使っていききたい。

Q、前回の新聞で購買に入れてほしい商品のアンケートをしたが、そういった商品を検討してもらえますか？
A、検討できる。しかし、温める機械がないので温かい商品を入れるのは難しいし、業者にも相談が必要。過去に中川実先生の発案でロングコップを商品化させたことがある。まだ食べたことがない人はぜひ。

Q、二十六年間、美高生と関わってきて、変わったところと、変わらないところは？
A、変わったところは昔に比べて文房具を買う人が少なくなったこと。



あっという間に完売

と。逆に変わっていないところは、生徒が元気なところ。新商品が入ると喜んでくれるかわいらしい姿も変わっていない。

Q、この仕事のやりがいは何ですか？
A、美高生の明るく気さくで、かわいらしい姿を見られるところ。だから二十六年も働けている。

家庭学科地域交流イベント Mi-Kaico

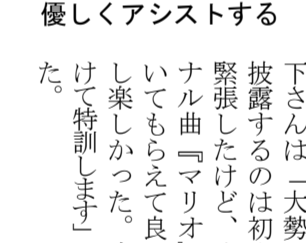


優しくアシストする

食物科は課題研究で取り組んだオリジナルレシピのスイーツを販売した。さつまいも大福など約百個が三十分で完売した。購入したお客さんは「高校生がこういう活動をしているとつい買っちゃうよね」と話した。

と買ひ物袋をいっぱいにしていった。生活情報科はポーチや髪飾りなど約百二十個を準備した。複数の商品を購入してくるお客さんが多く好評だった。体験コーナーはパネルアート、組みひもストラップ、ミシンでマスク作り、ピンワークなどあらゆる世代のお客さんで賑わった。組みひも体験した女の子は「お姉ちゃんに優しく教えてくれたように話した。吹奏楽部は久しぶり

A、購買委員だった生徒が教員となって再会したとき感動した。生徒たちの成長を近くで見守っている。いつも購買のお手伝いをしていただいている武田愛恵先生は澤田先生について「とても明るくて優しい先生。私が学生の時のことも覚えてくれていて、いつも懐かしさ話など、お喋りしながら楽しく仕事をしています」と話す。



弾き語る山下藍梨さん

の校外コンサートとなった。ジングルベルなどクリスマス曲を演奏を交えた。アンコールはこれまでも趣向を変え、一年生の山下藍梨さんによるオリジナルソングの弾き語りが行われた。山下さんは「大勢の前で披露するのは初めてで緊張したけど、オリジナル曲『マリオ』を聞いてもらえて良かったし楽しかった。次に向けて特訓します」と話した。



一緒に遊ぶ園児と高校生



一緒に遊ぶ園児と高校生

生活情報科の取り組み 地域の後輩たちと交流しよう

保育実習

十月二十六日から二十八日にかけて、若狭町立みそみ保育所・中央保育所・気山保育所の三か所で生活情報科一年生の保育実習が行われた。

生徒たちは事前学習で、保育方針や、子供たちの日常の様子、絵本の読み聞かせの仕方などを学んだ。実際の保育実習では、外遊びを中心に、給食配膳の手伝いや、事前学習で練習した絵本の読み聞かせを行った。実習を終えて石井来海さんは「子供たちがとても元気な姿を見て行動をするのが大変だったが、たくさん話しかけてくれたりして充実した体験をすることができた」と話した。

気山小学校ミシン教室

十月十九日、生活情報科三年生十二名が気山小学校五年生十一名を対象にミシン教室を行った。気山小学校にはミシンの数が少なく一斉に実習ができないため、生活情報科



Let's sewing!

の生徒に教えてもらえないかと依頼があったことから実現した。小学生はエプロンづくりに挑戦し、高校生がマンツーマンで優しく丁寧に教えていた。体験した小学生は「まっすぐ縫うことが難しかったけど、とても楽しかった」と喜んでいった。西森鈴音さんは「想像よりも上手で、上達も早くてびっくりした」と話していた。交流が深まる大変良い機会となった。



昔の暮らしを伝える福富さん

水月湖周辺の暮らしを学び、フィールドワークを行った。地元学とは、自分たちが住む地域を足元から見つめ直し、地域おこしにつなげる取り組みで、初めて提唱したのは熊本県水俣市の吉本哲郎氏だ。吉本氏は、水俣病で分断された住民の関係を立て直し、再び皆で生きていくために「舩(もや)い直し」を行った。舩いは昔の暮らしを伝える福富さん



地域を知りさらなる発展へ

十月二三日、第三回ビジネススカレッジが若狭町海山で行われた。今回は「地元学」を主題とし、田辺福富さん(八十一歳)から昔の水月湖周辺の暮らしを学び、フィールドワークを行った。地元学とは、自分たちが住む地域を足元から見つめ直し、地域おこしにつなげる取り組みで、初めて提唱したのは熊本県水俣市の吉本哲郎氏だ。吉本氏は、水俣病で分断された住民の関係を立て直し、再び皆で生きていくために「舩(もや)い直し」を行った。舩いは昔の暮らしを伝える福富さん

とは船を繋ぐ縄を意味する。そして水俣市を流れる川を源流域から下流域まで子供たちと一緒に歩いた。そこから流れる水が水俣市の全てを繋げていることを実感し、自分たちが繋がっていることを再確認した。福富さんは話の中で「昔と今を比べると昔のほうが助け合う心があった」と語っていた。福富さんが若い頃は、村の住民全員で協力して生活していたそうだ。特に漁業では、定置網を水月湖全体に広げ、三日間かけて引く。今と比べると労力が大きい人と人とのつながりが感じられたという。